

四、吉田道

(一) 歴史的解説

広島城下から吉田までの道は、区域や時代によって呼称が異なっているが、ここではこれらを総称して吉田道という。名称について、たとえば「高田郡中国郡志」には、

高田郡筋御城下へ出る往還筋

高田原より下小原・上小原・戸島・長田・井原・市川・小越・三田迄九ヶ村、郡内里程六里半余、但三田村より高宮郡狩留家村へ移り次第に御城下への往還に御座候、此道の中筋往還と申候

とある。途中の坂・秋山の二か村が脱落しているが中筋往還というのは『芸藩通志』に「志路・古屋・井原・市川・有留・保垣・長田・坂・戸島・上小原の一〇か村を中筋と称する」とあることから名がついたものであろう。

この道は、吉田の町が「城下町」という軍事的、政治的な町から「在郷町」という、この地域の経済的な中心へと性格が変わったこと、さらに吉田から広島城下への道が上根峠を越え、可部町を通る出雲街道へと移ったことよって、その性格が大きく変わっていった。また、賀茂郡や三田あたりの物資の輸送も「三田舟」に代表される三篠川の舟運へと移っていったことも大きな理由である。歴史的にこの道筋の変遷について概観してみよう。

この道が出来たのは、毛利輝元が天正十九年（一五九二）に広島城を築いた時である。毛利輝元の広島築城は三角州の上に築く「島普請」と呼ばれる困難なものであった。その際、築城・移転のための道として吉田から広島城下への最短コースであるこの道を整備した（軍事的な面を含めて）。『萩藩閩閩録』によると天正十七年（一五八九）には普請奉行であった二宮就辰に道の整備を命じており、天正十七年二月十六日付の輝元書状に

「一 中郡ミちのこと、先つくらせ可然由尤候、可申遣候、一 深川・ぬくしなミちの事兩人に可申候」（『二宮家譜録』）とある。さらに同二月廿三日付の書状に「從中郡佐東之往還普請之儀、急度可被申付候」（『萩藩閩閩録』）とあり、高田郡吉田の南部から国司・戸島（高田郡吉田町）を通過して三篠川上流へぬける豊島大道、三篠川に沿って下る中郡道、中郡から佐東への往還本道、さらに佐東深川から温品を経て広島に至る道路を整備したことがわかる（『高陽町史』）。また、この時には、この道筋にあたる井原（安佐北区白木町井原）の領主であった井原元尚を強制的に長門に移し、跡地を直轄領にしている（『広島県史近世』領国経済と城下町）。これは道路を直轄支配することにより城普請に必要な人夫の食糧を近くで確保することもあったのであろう。

ところで、道が具体的にどこを通過していたかは不明な点が多い（『白木町史』、『高陽町史』、『広島県史』）。そこで、これを実地調査によってたどってみると、次の道順が考えられる。

吉田を出て、豊島大道により向原を経て井原を通る。西側の山沿いに芸備線と交叉しながら井原の町中に入る。井原は田井原氏が城を築き早くから開けた地であり、市が開かれていた。市街地では町並みに沿って直角にまがることも多い。市街地を抜けるとコンクリートなどの畔道となった田の中の街道で市川へと進む。市川から秋山の堀越に至ると市場町の中を進む。堀越には志和堀分かれの道標があり、交通の拠点であったことがわかる。堀越から須沢へは、現在はいま使用されていない山道をいく。山中に石畳などの痕跡がある。須沢から吉永へは山沿いの竹藪、松林の山道として残っている。三田村の栗原・林・福永までは芸備線より山側に沿って進み、宮原で二度芸備線と交叉し、狩留家との境の柳瀬のつり橋に出る。狩留家では芸備線に沿って上深川へと進む。上深川からは友光の分岐点で左に曲がり木ノ宗山の山裾を小原・福田へと進む。大平では中深川から三田峠を越えてくる道と交叉する。福田か

ら馬木・温品までは谷あいを現在の県道と平行しながら、時には同一の道をとりながら進んでいく。温品の間所からは不明な点が多く、中山の万休寺の前から大内越峠を越え尾長から広島城下へ入る道や、中山から温品川(古川)にそって西に進み、才蔵峠を越え、尾長から広島城下へと入っていく道が考えられる。可児才蔵の伝承などはその傍証となろう。後には西国街道の整備に伴い岩鼻の南端を回り城下へと入るようになってきたと考えられる。『芸藩通志』所収の図では、岩鼻を通り温品方面に向う道の側に矢賀の市が描かれている。

慶長五年(一六〇〇)に芸備両国に入封した福島正則は、領内の経済の発展の一貫として主要な交通路の整備を行った。吉田から城下への道も「慶長以後往還土橋通り五竜山南麓、下小原往還広島より三次へ本街道に相成」(高田郡村社寺古城山由来記)とあるように、出雲街道が開通しこちらが中心になっていった。これに伴い、吉田道も性格を変えていった。深川へ年貢蔵が設置され、三篠川の舟運が開発されたことからわかるように、吉田から広島城下への主要道としての性格から、周辺地域からの年貢米や物産の輸送路へと変わったのである。

安芸国領内の道路が本格的に整備されるのは、寛永十年(一六三三)に幕府の巡見使が領内を巡察した時である。この機に、西国街道を二間半、石見・出雲街道を七尺、村伝いの小道を三尺と道幅の基準を定めている。安北郡内の道橋も普請奉行丹羽太郎八によって整備が進められている。この時に、七月中旬巡見使のうち市橋伊豆守は、可部・吉田・三次から賀茂郡を経て七月十五日に高田郡井原村、そこから深川筋の村々を通過して中深川・下深川を経る三篠川沿いに下り、翌十六日には祇園町に到着し広島城下へ向かっている。三篠川ではまず寛永九年(一六三三)から高宮郡代官が、広島から大工・石切工を派遣して高田郡小越村までさかのぼる工事の調査を始めている。途中洪水のために中止をしたが、同年秋には三田村まで川舟を浮かべている(高陽町史)。このころにはすでに

三篠川の水運の発達により深川から広島へは福田・馬木・温品を通らず、中深川、下深川、中島、可部に至る道が多く使用されるようになっていったことがわかる。現在、三篠川には旧道と呼ばれる道が左右両岸に、その痕跡をとどめている。川舟の場合、下りは流れにのっていき、上りは舟を岸から引いていく場合が多く、そのため両岸に道が作られたのではないだろうか。特に可部が在郷町として発展すると、この道を使用することがふえていった。『高宮郡中国郡志』によると可部町より狩留家村通三田村往還は渡り町一里塚より両中野村、沼田郡八木村枝郷、当郡中島村・下深川村・中深川村・上深川村・狩留家村まで式里六間で高宮を終り、高田郡三田に移るとある。物資はこの道を通る場合が多かったようである。深川から温品までの道は、主に賀茂郡方面への人、物資の通路として利用されるようになっていった。『芸備諸郡駅所市町絵図』によると「志和筋」として描かれており、羽倉・下徳良(世羅郡)・乃美・志和堀(賀茂郡)・狩留家(高宮郡)・府中(安芸郡)から広島城下へ通ずる道が記載されている。享保の頃は吉田道の南半分、狩留家・深川・小河原・福田・温品への道は、さらに温品川に沿って府中まで進み、大須の新開を横切り広島へ入る道が考えられる。

年代は不明であるが、藩の役人が往来する先触を次のように示し、同様の道順をたどっているのがわかる(『御山方役人入郡先触』、『白木町史』所収)。

十月十五日 御山方 印

| | | | | |
|------|------|--------------|------|------|
| 矢賀村 | 人足式人 | 中山村 | 温品村 | 馬木村 |
| 十七日昼 | 福田村 | 昼食仕構之事 | 小川原村 | 上深川村 |
| 同日泊 | 狩留家 | 泊り所仕構之事 | | |
| 十八日泊 | 三田村 | 十八日昼並泊り所仕構之事 | | |